北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽

歴史探訪MAP

OTARU CITY

小樽にある たくさんの歴史的建造物。
その姿は、それぞれの物語を
私たちに伝えています。
物語に思いを馳せてみませんか

日本遺産

日本遺産とは?

What's Japan Heritage?

日本遺産は、文化庁が地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを認定するものです。小樽市は、平成30年5月「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」に追加認定され、令和元年5月には「本邦国策を北海道に観よ！～北の産業革命「炭鉄港」～」が認定されています。そして、「北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽～「民の力」で創られ蘇った北の商都～」の認定を目指し、その魅力を発信しています。

発行：小樽市産業港湾部観光振興室
〒047-0007 小樽市港町4番3号
TEL 0134-32-4111（内線451）　FAX 0134-27-8600

小樽の文化遺産サイトはこちら▶ **小樽文化遺産ポータル**

観光情報提供サービス めぐるっと　iphone　android

荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間
～北前船寄港地・船主集落～

北前船

KITAMAEBUNE

日本遺産　KITAMAE-BUNE

江戸時代、経済の大動脈であった北海道・東北・北陸と西日本を結ぶ西廻り航路。主にこの航路を利用した商船は『北前船』と呼ばれ、大きな利益をもたらしました。明治になり北海道に開拓使が設置されると、各地から移民が押し寄せて人口が急増。小樽港は、生活物資も運んでいた北前船の重要な寄港地として発展を遂げます。船主たちは次々と小樽に進出し、大規模な石造倉庫などを建造して事業拡大していきました。料亭はにぎわい、商家や蔵が建てられ、そこには、商人たちの築いた町がありました。

写真提供/小樽市総合博物館

本邦国策を北海道に観よ！
～北の産業革命「炭鉄港」～

炭鉄港

TANTETSUKOU

日本遺産　炭鉄港

明治維新後、開拓が進められた北海道。空知では明治12年に幌内炭鉱が開鉱、明治15年には手宮ー幌内間で鉄道が開通し、石炭輸送が開始されます。明治30年代には北海道随一の港町となっていた小樽は、更に発展を遂げ、その軌跡は港湾や鉄道施設、炭鉱経営も行う財閥系商社の支店社屋などとして現在も数多く残されています。しかし、石炭から石油へのエネルギー転換、商業・金融機能が次々と札幌へ移転するなど、昭和40年代には衰退の兆しが見え始め、『炭鉄港』は国策としての使命を終えていきます。

写真提供/小樽市総合博物館

北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽

～「民（たみ）の力」で創られ蘇った北の商都～

HEART BEAT OTARU

北海道の「心臓」と呼ばれたまち OTARU

かつて小説家・小林多喜二は小樽のまちを「北海道の『心臓』みたいな都会である」と表現しました。『心臓』となる契機は、石炭輸送のため北海道初の鉄道が開通したことによります。明治中期以降、鉄道と港の整備により、豊富な北海道の資源の物流拠点となった小樽は、日本の近代化を支え最盛期には25の銀行が活躍し、「北日本随一の都市」となりました。終戦後も復興の拠点となった小樽は、石炭から石油にエネルギーが変わる中、高度経済成長期に衰退し、荒廃した運河を埋め立てて道路を建設する都市計画が決定。取り壊される倉庫を見た市民は、「まちの記憶」を守るため運河保存運動を始めます。「地域に生きるとは何か」というメッセージに応えた10年にもわたる運動の結果、運河の一部を散策路として整備し観光都市・小樽の礎となりました。歴史を生かす新たな展望を示した運動は、日本のまちづくり運動の先駆けとなりました。小樽に生きる人々が、遺産に新たな命を吹き込み、もう一度『心臓』の鼓動を動かし、今も感じとることができるのです。

写真提供/小樽市総合博物館

マップの見方

番号の色は、赤=「北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽」、緑=「北前船」、青=「炭鉄港」の構成文化財であることを表しています。2色の場合は両方の構成文化財であることを表しています。

01 日和山

北前船の船乗りたちが出港前に日和をみた場所。のちに、北海道で2番目となる灯台が建設されました。
祝津3-240

02 恵美須神社本殿の船絵馬

北前船の航海の安全祈願に船主や船乗りたちから奉納された船絵馬。奉納者の名前や出身地などが記されています。
祝津3-161

03 旧魁陽亭

北前船主や商人たちで賑わい、明治39年日露戦争後の樺太境界画定委員会議後の大宴会の会場にもなった料亭。
住吉町4-7

04 旧名取高三郎商店（現ナトリ画小樽本店/大正硝子館本店）

明治後期の小樽の代表的商家建築です。角地に建ち、防火のための袖壁「うだつ」を設けています。
色内1-1-8

05 旧百十三銀行小樽支店（現小樽浪漫館）

明治41年建築。角に玄関があり、上部にはギリシャ建築風な飾りも。建築当初の外壁は煉瓦ではなく石張りでした。
堺町1-25

06 旧金子元三郎商店（現おたる瑠璃工房 運河館）

明治20年建築。両袖のうだつ、漆喰塗りの開き窓など、建設時の姿をよく留め、典型的な明治期商店の造りとなっています。
堺町1-22

07 旧岩永時計店（現小樽オルゴール堂堺町店）

明治30年代建築。半円のアーチ窓、軒の装飾など細部にも凝ったデザイン。瓦葺屋根の一対の鯱は、商店では稀。
堺町1-21

08 旧第百十三国立銀行小樽支店（現オルゴール堂"海鳴楼"本店）

明治28年建築。平屋建ての小規模建物ですが、瓦屋根の飾りや、軒下の銀行シンボルのレリーフなどが特徴です。
堺町1-20

09 旧北海雑穀(株)（現小樽硝子の灯・彩や）

明治後期建築。和の造りを残しながら、彫刻模様付きのカーテンボックスや上げ下げ窓などもあり、和洋折衷な建物に。
堺町1-18

10 旧久保商店（現くぼ家）

明治40年に小間物雑貨卸の店舗として建てられた、堺町通りの歴史的景観を作る中心的な建物の一つです。
堺町4-4

11 旧木村倉庫（現北一硝子三号館）

明治24年建築。鰊漁場の中継倉庫として建てられ、廊下には港から引かれたトロッコのレールが今も残っています。
堺町7-26

12 旧共成(株)（現小樽オルゴール堂本館）

大正4年建築。石造りの多い小樽では珍しい、褐色の煉瓦造りの建築。アーチ状窓の要石や隅石などが特徴。
住吉町4-1

13 旧上勢友吉商店（現小樽オルゴール堂手作り体験遊工房）

大正10年建築。市内現存の数少ない本石造3階建の店舗建築。屋根窓や正面の窓の要石が強調されたデザイン。
入船1-1-5

14 旧右近倉庫

明治27年建築。木骨石造の大規模倉庫。妻壁の印「//」(一膳箸)は北前船の船旗にも使われていました。
色内3-10-18

15 旧広海倉庫

明治22年建築。採光のため屋根に段差が作られています。入口の二重アーチと越屋根が特徴です。
色内3-10-19

16 旧増田倉庫

明治36年建築。並んで建つ旧右近倉庫、旧広海倉庫とともにかつての倉庫街の壮大な景観が蘇ります。
色内3-10-19

17 旧大家倉庫

妻壁の「ヤマシチ」印、越屋根と入口の二重アーチが特徴の雄大な姿。運河地区の石造倉庫を代表する建物です。
色内2-3-11

18 旧小樽倉庫(現小樽市総合博物館運河館/小樽市観光物産プラザ/小樽百貨UNGA↑)

明治23年から建築。増築を重ね二つの中庭を囲む大倉庫に。煉瓦造の事務所を中心に左右対称になっています。
色内2-1-20

19 北前船関係古写真

北前船、小樽港など、ゆかりの場所を撮影した200点を超える写真群です。小樽市総合博物館運河館所蔵。
色内2-1-20

20 西川家文書

北前船による廻船業も営んだ西川家の、幕末から明治30年頃の文書。小樽市総合博物館運河館所蔵。
色内2-1-20

21 旧澁澤倉庫(現小樽ゴールドストーン/PRESS CAFE)

明治25年頃建築。北運河沿いに建つ、3つの棟を合わせたような姿が特徴的な倉庫です。
色内3-3-20

22 旧北海製罐倉庫㈱事務所棟・工場・倉庫

小樽運河の東側、大正10年代～昭和10年代に建てられた、小樽の鉄筋コンクリート造では初期の建物です。
色内3-1、港町4-6

23 田中酒造店(現田中酒造㈱本店)

田中酒造店として昭和2年に建築されて以来、かつての店構えを残しながら今日まで営業を続けています。
色内3-2-5

24 旧早川支店(現Vivresavie+mi-yyu)

明治37年の稲穂町大火で全焼した後に再建。防火戸やうだつが設けられ、うだつには鶴や亀の彫刻も。
色内2-4-7

25 旧磯野支店倉庫(現ISO)

明治39年、小林多喜二「不在地主」のモデルになった磯野進によって建築。佐渡の本店で醸造した味噌などを収納。
色内2-2-14

26 旧塚本商店(現cafe色内食堂/小樽北勝庵/小樽和菓子工房游菓)

大正9年建築。コンクリートで塗り固められた外壁、防火戸で覆われた出入り口や窓など、防火構造が施されています。
色内1-6-27

27 旧篠田倉庫(現小樽運河レストラン輝)

大正14年建築。内部の柱や梁を木で組み立て、外壁に煉瓦を積む「木骨煉瓦造」で、市内同規模の倉庫では稀少事例。
港町5-4

28 小樽港北防波堤

明治41年、廣井勇により日本初の本格的港湾設備として建設。百年以上経過した今も現役の「第一線防波堤」です。
手宮1-6付近

29 北炭ローダー基礎

石炭を積み出すための大型ベルトコンベア「北炭ローダー」の基礎部分。現存する唯一の石炭積み出しの痕跡です。
手宮1-4-1付近

30 旧三井物産小樽支店(現松田ビル)

昭和12年建築。1階と2階以上の壁の色のコントラストが鮮やかな印象の建物です。
色内1-9-1

31 旧三菱商事小樽支店(現小樽運河ターミナル)

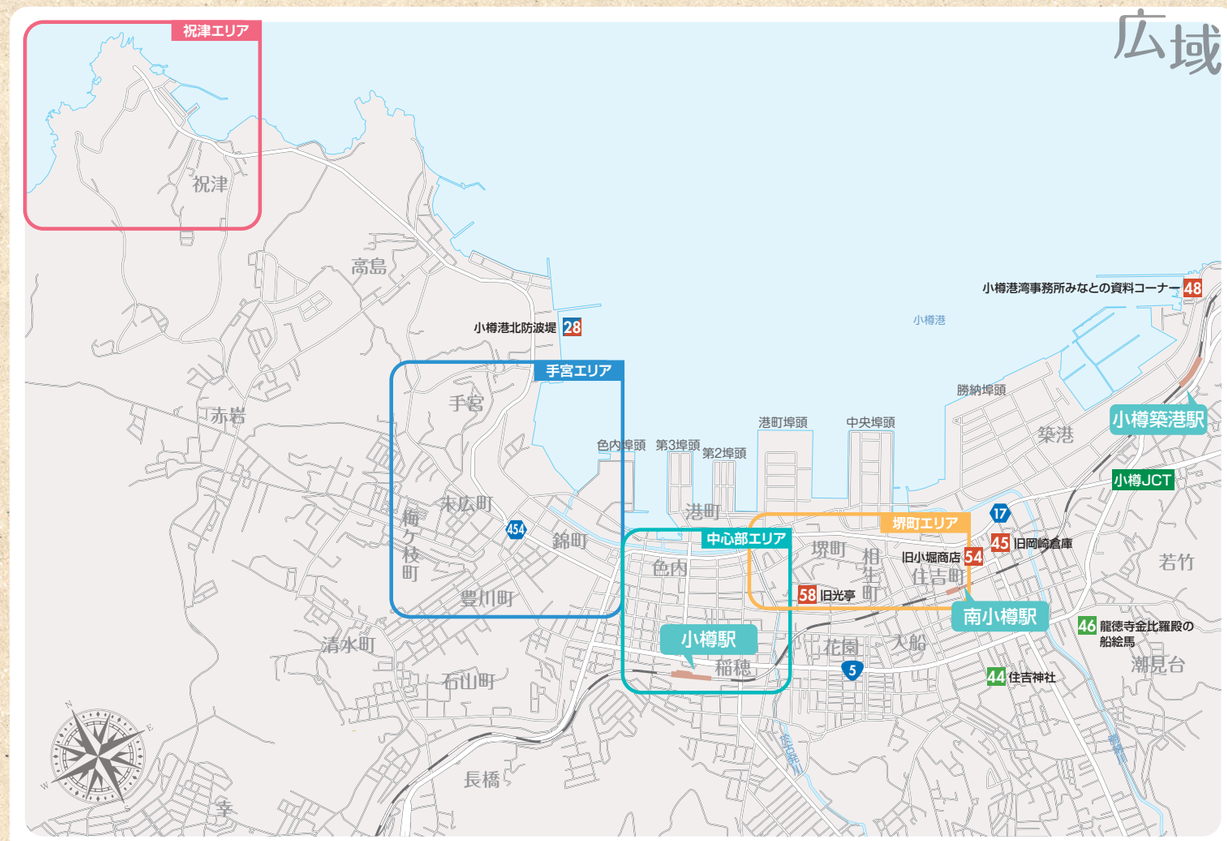
大正11年の建築当初は、外壁にレンガ色のタイルが貼られ、昭和12年に現在の姿に。1階正面の6本の半円柱が特徴。
色内1-1-12

32 手宮線跡及び附属施設

明治15年に北海道最初の鉄道、官営幌内鉄道として全線開通した手宮線。線路跡は散策路として整備されています。
色内1-15付近

33 小樽中央市場

終戦後、生活物資を運んだ行商たち。中央市場から通称「ガンガン部隊」が空知地区に鮮魚などを運びました。
稲穂3-11-2(中央市場3棟)



36 小樽運河

小樽港の発展に伴い、船から荷揚げするための艀が接岸しやすいように作られたのが小樽運河です。大正12年に完成し、昭和61年には一部を埋め立てて現在の姿となり、散策路等が整備されています。
港町～色内3

37 日本銀行旧小樽支店(現金融資料館)

明治45年完成。当時日本建築界のリーダーであった辰野金吾らが設計。ドームや望楼が配置され、当時の主な建築技術を取り入れるなど小樽が金融面でも北日本の中心であったことが窺えます。
色内1-11-16

43 旧北海道銀行本店(現小樽バイン)

明治45年建築。銀行建築独特の重厚な雰囲気の建物です。正面はほぼ建築時の姿を残しています。
色内1-8-6

44 住吉神社奉納物

海にまつわる住吉神社には、第一鳥居や石灯籠など航海の安全を祈願して寄進されたものが多数残っています。
住ノ江2-5-1

45 旧岡崎倉庫(3棟)(現田中酒造㈱亀甲蔵)

明治38、39年建築。小樽で初めて市街地が形成されたのがこの周辺。3棟の連続する倉庫です。
信香町2-2(1号棟)
信香町2-24(2・3号棟)

46 龍徳寺金比羅殿の船絵馬

北前船の航海の安全祈願に船主や船乗りたちから奉納された船絵馬。奉納者の名前や出身地などが記されています。
真栄1-3-8

38 旧三井銀行小樽支店(現小樽芸術村)

昭和2年、曽禰達蔵の建築事務所が設計。石積み煉瓦、アーチ窓といった古風で重厚なルネサンス様式の外観に、当時最先端の耐震構造が採用されています。
色内1-3-10

39 旧荒田商会(現小樽芸術村アールヌーヴォー・アールデコグラスギャラリー)

昭和10年建築。小樽運河沿いに建ち、隣接する建物と中庭で結んで歴史的景観のまとまりを作っています。
色内1-2-17

40 旧高橋倉庫(現小樽芸術村ステンドグラス美術館)

大豆を収める倉庫として大正12年に建築。前面は小樽運河に、背面は出抜き小路に面しています。
色内1-2-17

41 旧北海道拓殖銀行小樽支店(現小樽芸術村似鳥美術館)

大正12年、小樽経済の絶頂期に建設され、その栄華を伝えています。初期鉄筋コンクリート造の主要な建物です。
色内1-3-1

42 旧越中屋ホテル(現UNWIND HOTEL&BAR OTARU)

昭和6年建築。正面中央の縦に並ぶ窓や、両脇の丸窓などが特徴で、外国人旅行客のための別館でした。
色内1-8-25

34 旧手宮鉄道施設(現小樽市総合博物館本館)

官営幌内鉄道の開業から鉄道の中心として活躍した施設。中でも明治18年竣工の機関車庫三号は、現存する日本最古の機関車庫で、レンガ造りの美しい建築物となっています。(国指定重要文化財)
手宮1-3-6

35 旧日本郵船㈱小樽支店及び附属倉庫群

明治37年着工、同39年落成。佐立七次郎の設計により、一流建築家が当時の最先端技術で残した作品の象徴的存在となっています。商都小樽を代表する商業建築物です。(国指定重要文化財)
色内3-7-8

- 47 小樽市総合博物館所蔵鉄道車両群 手宮1-3-6
- 48 小樽港湾事務所みなとの資料コーナー収蔵防波堤関係資料 築港2-2
- 49 旧嶋谷倉庫 色内1-2-18
- 50 旧小樽地方貯金局(現市立小樽文学館・美術館) 色内1-9-5
- 51 旧第一銀行小樽支店(現㈱トップジェント・ファッション・コア) 色内1-10-21
- 52 旧第四十七銀行小樽支店(現㈱渋谷建設) 色内1-6-25
- 53 旧安田銀行小樽支店 色内2-11-1
- 54 旧小堀商店 住吉町14-4
- 55 旧前堀商店 色内2-9-22
- 56 旧小樽商工会議所 色内1-6-32
- 57 JR小樽駅本屋およびプラットホーム 稲穂2-22-15
- 58 旧光亭(現北海製罐㈱罐友倶楽部) 東雲町3-8
- 59 旧浪華倉庫(現小樽運河食堂) 港町6-5
- 60 澁澤倉庫 港町5-4

※住所は全て小樽市です　※()内は現在の利用名です(令和3年1月現在)